

難病患者の模擬体験での気づきを看護師のケアへ活かす

井上あづさ¹⁾ 濱部吉美¹⁾ 房安真由¹⁾ 五百川明子¹⁾* 國森佳子¹⁾ 高間さとみ²⁾

1)国立病院機構鳥取医療センター看護部 1 病棟

2)鳥取大学医学部保健学科看護学専攻地域・精神看護学講座

Application of things noticed by nurses during simulated intractable disease patient practicums to nursing care

Azusa Inoue¹⁾, Yoshimi Hamabe¹⁾, Mayu Fusayasu¹⁾, Akiko Iogawa¹⁾*, Keiko Kunimori¹⁾,
Satomi Takama²⁾

1) The 1st Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Nursing Care Environment and Mental Health, Division of Nursing, School of Health Sciences, Tottori University Faculty of Medicine

*Correspondence: byoutou1@tottori-iryō.hosp.go.jp

要旨

平成 27 年度に実施した神経難病病棟の看護スタッフによる患者模擬体験についての看護研究の追跡調査を行い、患者模擬体験によって得られた気づきから、病棟看護師が変化すると認識している看護ケア行動についての具体的内容を明らかにした。それにより、患者模擬体験を通して患者の思いに近づき、患者が看護者に気づいて欲しいという思いを汲み取ろうと意識することが、看護実践の変化に繋がることが分かった。また、患者と類似した感覚を体感したことで、日頃の看護を振り返ることが看護技術の基本に立ち返るということに繋がることが、日常的に繰り返されるケアを体験することで実感や気づきをよりケア行動に反映し易くなることが分かった。鳥取臨床科学 9(1), 1-8, 2017

Abstract

This study was a follow-up study in the field of nursing of a simulated-patient practicum for the nursing staff at an intractable neurological diseases ward that was conducted in 2015. It elucidated the specific details of nursing care behaviors in which ward nurses perceived changes based on things they noticed during the simulated-patient practicum. The results indicated that noticing what patients are thinking and becoming aware that they should make efforts to ascertain thoughts that the patients want them to notice as a result of participation in the simulated-patient practicum led to changes in their nursing practices. The fact that nurses reviewed their daily nursing care as a result of experiencing feelings and sensations similar to those experienced by patients made them return to nursing skill basics, and the fact that they experienced the types of care that they provided on a daily basis made it easier for them to reflect their feelings and things they notice in the care they provide. Tottori J. Clin. Res. 9(1), 1-8, 2017

Key Words: 筋萎縮性側索硬化症, 神経難病病棟, 患者模擬体験, 看護ケア, コミュニケーション;
amyotrophic lateral sclerosis, intractable neurological diseases ward, simulated-patient practicum, nursing care,
communication

はじめに

A 病院の神経難病病棟は、主に筋萎縮性側索硬化症（以下 ALS とする）患者を中心とした病棟であり、日常生活はほぼ全介助である。意思疎通が困難なため、看護師の判断でケアを行っているという現状がある。平成 26 年度に行った病棟勉強会で、患者模擬体験を一部のスタッフに実施した。その結果、「～して欲しい、～して貰えなくて不安だった。」など、看護師への要求や希望の言葉が多く、看護師が良いと判断しケアしていることが、必ずしも患者にとっての良いケアとは限らないことが分かった。

以上の状況を受け、平成 27 年度の看護研究では、濱部ら¹⁾は神経難病病棟の看護師を対象に、患者が日々看護師から受けているケアについての患者模擬体験を行った。その結果、言語や表情を奪われた ALS 患者に対し日常的に行っているケアが患者にとっての良いケアとは限らないこと、患者は身体言語でコミュニケーションを取ろうとしていること、その為には患者の心理を把握することが必要であることが明らかになった。茂野ら²⁾は、「患者-看護師の役割を相互に入れ替わりながら演じたり、行動変容を求める人・求められる人の立場になって感じる・考えるという体験をすることで患者の存在をより身近に感じ、より現実感を高めることができる。」と述べている。今回、平成 27 年度に実施した患者模擬体験によって得られた気づきから、看護師が変化すると認識している看護ケア行動について追跡調査を行った。

I. 研究目的

難病患者の患者模擬体験により、看護師が変化すると認識する看護ケア内容、およびその模擬体験により、看護師が変化すると認識する看護ケア行動の具体的内容を明らかにすること

を目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象: A 病院神経難病病棟に勤務し、平成 27 年度に神経難病患者模擬体験をした看護師 20 名中、継続して勤務している 15 名。
2. 研究期間: 2016 年 7 月～3 ヶ月間。
3. 研究場所: A 病院神経難病病棟。
4. データの収集ならびに分析方法
 - 1) 平成 27 年度、仰臥位から右側臥位に体位変換後、胃瘻注入を開始する場面の患者模擬体験をした看護師へ、体験後、難病患者と関わる中で変化すると認識する看護ケア行動や看護ケア内容について、アンケート調査用紙を用いて具体的な記載を求めた。アンケート調査用紙は、濱部ら¹⁾の研究結果に基づき、変化があると認識している可能性がある看護ケアの内容項目を参考に独自に作成したアンケート調査用紙を用い、該当する項目に複数回答チェックし、具体的な記載を求めた（図 1）。
 - 2) 分析方法: アンケートの項目ごとに単純集計した。さらに、「変化があった」と答えた対象者の自由記載の内容を分析してラベル化し、カテゴリー分類した。

III. 倫理的配慮

本研究についての説明・同意書を用い、研究目的、方法を説明した。無記名調査により特定できないことから、アンケート調査用紙の提出後の同意撤回はできないものとし、個人を特定することはないこと、得られたデータは研究以外で使用しないこと、研究終了後には速やかに破棄することを説明し、署名にて同意を得た。

IV. 結果

平成 27 年度に患者模擬体験を体験し、継続